

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月15日現在

機関番号：37404

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20520198

研究課題名（和文）使者文学の基礎的研究—戦国・島原の乱を中心として—

研究課題名（英文）Fundamental Study on Messenger Literature – Focusing on the Shimabara Rebellion

研究代表者

武田昌憲（TAKEDA MASANORI）

研究者番号：00221375

研究成果の概要（和文）：

島原の乱に出陣した九州の藩以外にも「使者」という名目で出陣した各藩の「出兵」状況を調査した。合わせて島原の乱が全国的な騒乱であり、単なる地域の一揆とは異なる面も持つことを推測した。乱の鎮圧に向う紀行的な文面にも文学的な評価が下せないか、可能性を指摘した。各地の資料の発掘にも勤めた。

研究成果の概要（英文）：

There were many clans from places across the country not just located in Kyushu that participated in the Shimabara Rebellion.

Most of the clans that participated in the rebellion went to Shimabara as “messengers”. They fought in battles and some of them died.

It should be noted that this rebellion was not a mere “revolt”, but rather a “rebellion” on a nationwide scale. Both pieces of work and documents that were created by participants in the rebellion had the characteristics of being travelogues.

These works should be studied further in the future. There are documents related to the Shimabara Rebellion in locations across the country. These documents should be investigated in future research.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	300,000	90,000	390,000
2010年度	300,000	90,000	390,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、日本文学

キーワード：使者文学・島原の乱（島原一揆）・軍記文学・島原の乱出兵

1. 研究開始当初の背景

島原の乱に参加した藩は九州の藩が大半であるが、一方で各地の藩から「使者」の名

目で藩士を多く送り出し、中には鉄砲隊も連れて行くなど、事実上、出兵した記録が多く見受けられる。その記録をまとめることで、

この乱が、たんなる地方の農民一揆ではなく、全国に影響を与えた乱ではないか。そしてそれに関わる記録を文学「使者文学」として評価できないかという思いに至ったが、この件に関しては何も研究されていないのでこのたびの研究課題として取り上げた。

2. 研究の目的

島原の乱の戦闘参加の状況が、これまでの史実とは異なり、未公認の各藩からの兵が参加している状況を探り、当然、各藩にも、独自の島原の乱の記録が存在すると推定される。其れを探ることが目的の一つ。次にその記録から、戦場に向かう出陣紀行文学としての可能性を探ってみる。記録から文学への条件を探る。

3. 研究の方法

九州を中心とする県立・大学図書館を訪問して、資料の閲覧・発見・紹介に努めた。東京大学史料編纂所、国会図書館、内閣文庫、早稲田大学図書館等での資料調査を行った。各藩史を調査するため、『新編物語藩史』全12巻、と『藩史大事典』全8巻を中心に調査し、各都道府県史（明治期以来の物を含めると数千点以上ある）や都道府県大事典等を利用して、出来るだけ最新の考察と原史料に当たれるようにしたが、時間が不足したので途中までの調査報告となった。残りは整理したうえで今後も継続していきたい。

4. 研究成果

(1)、島原の乱の総論として、『戦国軍記事典一天下統一編一』（共著）の「島原の乱」の執筆が完成して、出版（和泉書院、平成23年12月）出来たのは幸いであった。これまで出版印刷されている全35作品について解題・紹介を施すことが出来た。是程の島原の乱に関する紹介は今までなかった。取り上げた作品は以下の通り。

版本嶋原記・嶋原記・島原天草日記・天草土賊城中話・十時三弥介書上之写・島原一揆松倉記・島原陣覚書・吉利支丹物語・四郎乱物語・南島変乱記・参考天草軍記・林小左衛門覚書・佐野弥七左衛門覚書・別当左左衛門覚書・肥前国有馬古老物語・有馬原之城兵乱之記・島原一乱家中前後日記帳覚・有馬五郎左衛門筆記・松竹吉右衛門筆記・並河太左衛門記・肥前国有馬戦記・原陣温古録・黒田家出勢人数並手負討死聞書・有馬記録・有馬之役・肥前国有馬高来郡一揆籠城之刻々日記・高来郡一揆之記・耶蘇天誅記・立花立斎島原戦之覚書・山田右衛門作以言語記・鬼理至端破却論伝・水野家嶋原記・原城紀事・天草一揆書上帳・肥前国有馬肥後国天草一揆略記。

(2)、島原の乱の軍記を中世軍記として捕え、其のダイナミックな様を中世軍記文学の

最期の余韻として位置付ける。

(3) 島原の乱における「使者」の戦いを、毛利藩・仙台伊達藩・紀州和歌山藩について検証した。毛利藩は『萩藩閥閥録』や『毛利四代実録』等から其の様子を組み立てる事が出来る。使者は公式には2名幕府軍に派遣していることになっているが、実際には鉄砲隊を率いた派兵である。寛永十五年の板倉重昌が指揮し、重昌が戦死した幕府軍の攻撃にも参加している。原城陥落の時にも討死者を出している。乱後、帰国した時、よく戦わなかった（働きが悪い）者を召し放つ等、厳しい処分を下された者もいる。しかし公式には「使者」2名となっている。このことから各藩の「使者」の実態も根本的に考え直す必要がある。使者の数800人とか12000人とか諸記録類に出ているが、今後の検討が必要である。仙台伊達藩は最も遠方からの「使者」の派遣として確認できる。参加実数は不明であるが確かに参戦している。紀州和歌山藩は7名の「使者」以外にも船の用意や、実数を把握できないくらい多くの藩士が勝手に参戦して行ったようである。藩でもその実態が十分に把握できていない様子が分かる。

（『南紀徳川史』）。使者の中には戦使者も出ている。「使者」のほとんどは帰還後、恩賞を受けているが、水戸藩は「使者」として派遣したのに勝手に参戦したということで逆に罰を受けている例も見受けられる。土佐藩でも「使者」を派遣して負傷し、帰国途中で落命する者もいたが、今、調査を継続中である。

また、廃藩になった藩や小藩等では記録が残らないものも多く、また、藩史の編集者により事件の興味のあり方が大きく左右され、今後の困難が研究・調査中に予想されたが、ともかく地道に続けて行きたい。

(5) 内閣文庫の島原の乱関係軍記の書誌を継続して調査。17本の写本・版本を今回調査して報告した。即ち「耶蘇制罰記」・「耶蘇制罰記」（同本）・「耶蘇天誅記」・「耶蘇天誅記 前録」・「耶蘇天誅記」（同本）・「耶蘇天誅記 前録 全」・「黒澤佐大夫 岸半右衛門 島原一揆之時節働之覚」・「治代普頭記」・「耶蘇宗門制禁大全」・「寛永平塞録」・「肥前国天草騒動記 全」・「有馬一揆西村五兵衛覚書」・「島原合戦首帳」・「別当左左衛門覚書」・「一名島原一揆之次第」・熊谷氏島原記・並河太左衛門覚書」・「天草一揆書上帳」・「天草軍談」・刊本「嶋原記」・刊本「嶋原記」（天草物語）すでに23本調査していたが、残りがあと10本見受けられる。全部で50本もあるので、目下のところ島原の乱関係軍記・資料としては最も多くの作品を擁している機関の一つと言ってもよい。今後の総合的調査を期したい。

(6) 『寛政重修諸家譜』全22冊。約14

00巻に載る「島原の乱」記事を調査した。乱直後に作成された『寛永諸家系図』も調査したが、前者の方が圧倒的に数が多く詳細である。この『寛政重修諸家譜』には79名に乱（一揆）の記事が見受けられ、別刷の「報告書」にも掲載しておいた。別の機会に改めて報告・検討したい。乱に参加したこと自体が家の誉れといえる様子がかがえるのも時代が下って戦いのない時代から遡ったための数少ない功績のためである。また幕府から「上使」として派遣された家は必ず記述している。これまで翻刻・紹介された諸作品・諸記録とは異なる視点も見受けられ、今後の課題として掲出しておきたい。

(6) 全国の藩出兵の状況は、幕府からの直接の「上使」と各藩からの「使者」の派遣を含めて調査した。寛永十四年11月から翌年の2月までの存在した藩は現在のところ224藩確認できた。そのうち九州の藩31藩中27藩が出兵している。残りの九州以外の藩193藩中、出兵、または「使者」という名目で出兵したか、または何らかの協力をしている藩が少なくとも25藩確認できた。即ち仙台藩・相馬藩・山形藩・水戸藩・高岡藩・忍藩・松代藩・金沢藩・福井藩・深溝藩・大垣藩・亀山藩・柳生藩・小泉藩・和歌山藩・園部藩・鳥取藩・福山藩・広島藩・岩国藩（一応藩としておく）・萩藩・松山藩・今治藩・宇和島藩・土佐藩である。これ以外の藩は、まだ確認できていない藩も多くあり、今後の調査により数が増えるものと予想される。特に徳川御三家中、尾張名古屋藩だけは出兵と戦闘参加が確認できない。今後の調査を期したい。

(7) 島原の乱を扱った『嶋原記』のような作品は『太平記』の影響がよくみられることが近年指摘されている。又、『太平記』の注釈書である『太平記評判』（『太平記評判秘伝理尽鈔』）の研究も最近行われ、この作品が後世の作品に与えた影響も考える必要があるのではないと思われる。ちょうど島原の乱関係記事のある『獻祖遺跡 有馬日記附』（佐賀県立図書館蔵・但し同図書館の請求書名は『有馬一乱日記』）に『太平記評判』の記事が載り、其の成立と取り扱い方の危険性が記してあるので注目した。

(8) 東京大学史料編纂所蔵の『大河内家記録』の調査では、全24冊のうち第16冊から第23冊までが島原の乱関係の記録であった。大河内家は幕府の上使、松平信綱の家である。朱書き・朱点の箇所を確認、彩色図面の確認も合わせて調査したが、詳細は今後の研究に待ちたい。一応資料名を掲げておく。第16冊目『島原乱記』（但し原本外題なし）、第17冊目『天草島原利支丹一揆発之事』『島原一揆之起』『天草一揆発最初之聞

書』『浅羽左源次聞書』『島原御陣之節着頭』『肥前国島原表留書』『板倉周防守書状ノ写』、第18冊目『寛永十三年乙丑（丙子）秋以来肥前国高来郡一揆之儀ニ付覚書、寛永十四年乙丑秋以来肥前国高来郡一揆之儀ニ而覚』『自寛永拾四年至拾五年戊丑肥前国嶋原並有馬肥前天草之事共増井所左衛門覚書』、第19冊目『肥前国有馬高来郡一揆籠城之刻日々記一長谷川源右衛門留書』、第20冊目『有馬仕寄夜廻り之帳』、第21冊目『有馬陣之節道具等之覚』『貞享四年九州有馬へ参候武道具留帳一松井五郎右衛門所より遣ス』『西国衆馬印留書』『火薬其外受渡之覚』『陣屋普請積り』、第22冊目『有馬原城惣責之時寄手諸手之死傷者氏名人員』『手負死人書付 五通』『肥前神崎より有馬道筋迄』、第23冊目『寛永十四年丁丑九州進發翌年虎刻江戸帰陣一中之書付』以上。

(9) 上使の行程一板倉重昌と松平信綱の場合を覚書として考察した。

寛永十四年（一六三七）十月に、島原で一揆が勃発する。天草・島原の乱の始まりである。近年、島原の乱を当時の言葉を重視して「一揆」と称しているが、立派な内乱であるので、ここでも島原の乱と一貫して使うことにする。さて、翌月の九日、江戸に其れを知らせる急使が到着。幕府は直ちに一揆鎮圧のために即日上使を派遣する。指名されたのは二名。板倉重昌と石谷貞清であった。

板倉重昌の行動に関しては諸記録がある。ここでは福島県立図書館蔵『嶋原一揆有増之記』（写本・今回書誌は省略）を見ることとする。これによると、板倉重昌は、江戸へ急使が到着した翌日早々（十一月十日）に江戸を出立している。

すなわち板倉重昌は寛永の島原の乱において、幕府から最初に上使を命じられて現地に向かった人物である。そして、翌年元旦の原総攻撃で、総指揮官でありながら、一揆の城に最前線で突撃して敵の銃弾を受けて討死した人物としても歴史上に名を残すことになった。

前出した『嶋原一揆有増之記』による板倉氏の原城までの行程を見ると、十一月九日に島原への上使を命ぜられると、即、翌十日の

寅の上刻に江戸を出立している。家臣数十名を供にし、後に兄の京都所司代を勤めている周防守からも京都から四十六名の家臣を付けられている。

その行程をしめすと以下ようになる。

十日 戸塚で休み、小田原泊。

十一日 箱根で休み、吉原泊。

十二日 江尻で休み、金谷泊。

十三日 掛川で休み、袋井泊。

十四日 吉田で休み、池鯉泊。

十五日 宮で休み、四日市泊。

十六日 亀山で休み、伏見泊。

十七日 大坂着。四日間逗留。ここで船の手配・物資集積・情報収集等を行っている。

二十日 出船。二十四日の小倉までの行程は瀬戸内海を通過したことしかわからない。

二十四日 豊前小倉着。陸路。

二十五日 豊前黒崎泊。

二十六日 豊前寺井。

二十七日 肥前竹崎。

二十八日 肥前光城着。三日逗留。

十二月一日 嶋原城着。四日逗留。

六日 有馬表着(原城着)。

二十一日目で嶋原に到着し、現地での情報収集と現状把握に勤めている。これは何もわからない状態で懸命の高速移動をしてきたためやむを得ないことといえる。(この点、事情をよく把握してから下向した、二番手の松平信綱の上使とは異なる気の毒な状況であったと言える)

一揆は「春の城」(原城)に籠城していることが確認されると、重昌が六日に現地(有馬表)へ行き、二十日の総攻め。そして元旦の重昌討死となる第二回目の総攻めへと続くことになる。重昌の跡を、同行していた嫡男の重矩が継ぎ、次の上使、信綱の到着を待つこととなる。

一方、松平信綱は将軍家光から上使として現地派遣の命を受けてから、出立するまで時間的余裕があり、というより幕府の要職にあったので、江戸を離れるために諸準備に時間がかかったものと思われる。しかも出立してから現地に到着するまで約三十日もかかっている。

幕府は十一月二十七日に次の上使として老中松平信綱と美濃大垣城主戸田氏鉄の派遣を決定。信綱は嫡子の輝綱を連れて現地へ赴く。

『嶋原天草日記』(続々群書類従 四)は信綱の嫡男輝綱が父と共に嶋原に同行して行った時のことを後年まとめたものである。これによると、三十日の行程がわかる。

以下『嶋原天草日記』の記載から信綱一行之行程を追ってみる。

信綱は十二月一日に出立するはずであったが、公用に取り紛れ、三日の辰一點出発した。従卒千三百名であった。板倉重昌の数十名と比べるとその重々しさがわかる。しかもまだ、板倉重昌の討死や幕府の総攻撃の失敗の報告が入ってくる前での事前の情報分析の結果であろうか。信綱の用意周到さが従卒の数でも推し量ることが出来る。

三日 神奈川(着か泊か不明。以下同じ)。

四日 大磯。五日 箱根。六日 榑原。

七日 岡部。八日 袋井。九日 白須賀。

十日 岡部。十一日 熱田。十二日 庄野。

十三日 水口。十四日 伏見。十五日 伏見出船。

十六日 大坂、十七日、十八日同所。

十九日 川口より出船。

この間、紀州徳川大納言頼宣から御家人の市川甚右衛門、吉田三右衛門、山中作右衛門、田屋五郎左衛門(寅二月二十七日討死)、が西国へ扈従のために付けられる。

二十日 播州室。二十一日 備前牛窓。二十二日 下津井。二十三日 備後鞆。二十四

日 只海。二十五日 安芸釜川。二十六日 防州上関。二十七日 長州下関。二十八日 豊前小倉。二十九日同所。晦日 筑前飯塚。元日 筑前原田。二日 肥前寺井。三日 同国島原。板倉内膳重昌の討死の報入る。

四日 有馬着。

ここで注目されるのは、徳川御三家のひとつ紀州藩から参加した家臣(四人)がいて、原城攻めの時に参戦して討死した者がいることである(このことについては『南紀徳川史』にも記載があるので、別に述べたい)。紀州藩からの使者と見てよいのだが、他藩からの参加者(使者)もどのくらいいて、戦闘にどのくらいの人数が参加したのであろうか。興味が尽きない事項である。また、板倉重昌が大坂から九州小倉まで足掛け五日間で渡航しているのに、信綱一行は倍の十日間駆けているのも注目される。場合によっては、元旦前に信綱一行が現地に到着し、元旦の総攻撃と重昌の討死と幕府の敗戦がなかったかもしれない。

さて、次にその後の上使の到着を記しているので、続けて記す。

七日 上使、兼松五左衛門が十二月二十五日に江戸を発足して今日到着。八日江戸へ戻る。

二十三日 上使、宮城越前守、石川弥左衛門来る。

二月一日 上使、酒井因幡守、駒木根長次郎来着。(正月二十日発足)

十七日 上使、市橋三四郎来着。二十日江戸へ戻る。

二十一日 上使、水野藤右衛門来着。

二十六日 上使、三浦志摩守、村越七郎左衛門来着。

(二十八日、一揆の籠もる原城陥落)

二十九日 上使、下曾根三十郎、杉原四郎兵衛来着。

三月十七日 上使、松平出雲守来着(長崎)。

二十二日 上使、太田備中守源資宗来着(長崎)。

有馬に着くまで三十二日の長期間の旅程である。余りのゆっくりさ加減で、十二月二十五日の新たな江戸からの上使が十三日かけて有馬に到着したのが、信綱一行が到着してわずかに三日後の一月七日であったことからわかる。上使が幕府から下されたのは、山本博文氏の「島原への上使一覧(寛永十四・十五年)」(『寛永時代』八十一頁、吉川構文館 平成四年)の表に詳しい。それによると巡察・目付・使い等を含め、総勢二十六人に達する。『嶋原天草日記』では江戸からの上使のみ記しているようである。当然、これら二十六人の使者には少なからず家臣が付いてきたものと思われる。その数も不明である。

ちなみに一揆鎮圧後の信綱父子の行程も見てみよう。

四月九日 有馬から嶋原 十日、十一日、十二日 同所逗留。

十三日 肥前天草の須本。三角着船し「遊詠」。

十四日 同国河内浦本戸(本渡)を経る。輝綱は海路で富岡へ至る。

十五日 富岡から海上へ。

十六日 長崎 十七日～二十四日 同所逗留。

二十五日 時津から海路で平戸。二十六日、二十七日 同所逗留。オランダ人の「住宅」の「城闕」ぶりを見る。二十八日、二十九日 同所逗留。

晦日 唐津。名古屋(名護屋)の太閤秀吉・家康公の陣所を「遊詠」。

四月一日 筑前銘之浜(姪が浜)。

二日 同国赤間。

三日 豊前小倉。飛脚奉書到来によ

り、四日、松倉家、寺澤家等の処分を下す。
五日～十九日 同所逗留。この間、相撲の会
(七日)、饗応(八日)、鹿狩り(十日)、海布
刈明神へ「遊詠」と毛利家の「饗応」(十一日)。
「饗応」(十五日)。

二十日 長州下関。

二十一日 周防上関。

二十二日 安芸釜刈。厳島「遊詠」。清
盛一族の胴丸見物。

二十三日 備前下津井。

二十四日 播磨室。「饗応」。

二十五日 大坂。二十六日 同所逗留
「饗応」。

二十七日 淀。「饗応」。京都。二十八日
同所逗留。「饗応」。

二十九日 草津。「饗応」。

五月一日 水口。亀山。「饗応」。

二日 庄野。

三日 熱田。

四日 岡崎。

五日 白須賀。

六日 袋井。

七日 岡部。

八日 吉原。「饗応」。

九日 箱根。

十日 大磯。

十一日 江戸到着。

帰りの行程もあわせて考えると物見遊山的な余裕のある上使である。特に帰りは本州に入ってから行きと同じ宿泊地が多く、また各地で「饗応」を受けていることが分かる。その都度、乱(一揆)の話題で話が盛り上がったことと思われる。信綱一行は江戸に戻るまでに何度も合戦話をして話の内容を整えて行ったと予想もできる。將軍家光に報告する時にはかなりの「名調子」になっていたのではないかと想像される。

また、軍記物には行程が必ずあり、紀行文

的な文学要素もある。これらもどうひょうかしていくか、今後の課題としたい。

さて、上使の討死という板倉家のその後は、同じく老中という幕閣の枢要にいた信綱のその後と比べてどうであろうか。信綱はえどに凱旋した後、翌年の寛永十六年(一六三九)には武蔵忍城主三万石から同国川越六万石に禄高倍増となり、正保四年(一六四七)には一万五千石加増の合わせて七万五千石の中堅大名となる。その後は寛文二年(一六六一)輝綱の時に信定等三人に五千石、五千石、千石戸分与。元禄七年(一六九四)下総国古河に移封。七万石。正徳二年(一七一二)三河国吉田へ移封。享保十四年(一七二九)遠江国浜松に移封となる。寛延二年(一七四九)再度三河国吉田へ移封。明治二年(一八六九)、七万石のまま豊橋藩となる。

一方の板倉家は、寛永元年(一六二四)に新封として三河国深溝に一万一千八百石を受け、同十年には一万五千石に加増され、同十四年の島原出兵に至る。しかし、藩主重昌の討死と多くの家臣を失うという大損害を被りながら、無理な作戦で多くの幕府軍の死傷者を出して、將軍家光の不興を買ったためか、帰還後も幕府から何らの恩賞もなく、重矩は一万五千石のままであった。翌年の寛永十六年、重矩は重直に五千石分与し、大名の資格ぎりぎりの一万石なったまま、信綱が三万石加増(倍増)されたのに対し、重矩は三河国深溝から同國中島へ加増なしの一万石のまま移封された。引越しの分だけ負担増という処置である。

重矩はこのまま二十一年間、不遇の扱いを受ける。ようやく万治三年(一六六〇)に一万石の加増を受け二万石となると、寛文六年(一六六六)には二万石加増の四万石となる。寛文十一年(一六七一)には三河・上総・武蔵から一万石分加増となり、合わせて五万石

となった。そして翌年重矩は下野国烏山に移封となる。続いて天和元年（一六八一）重矩は武蔵国岩槻に移封。翌年には信濃国坂城に移封。天和三年重寛の時、重宣に二万石分与して三万石となる。元禄十五年（一七〇二）、陸奥国福島に移封し、明治元年に二万八千石に減封の後、翌年三河国重原に移封されるまで福島に藩を置いている。

福島県立図書館所蔵の板倉藩の島原の乱出陣記録『嶋原一揆有増之記』や『嶋原記』等が散見・所蔵されているのも、板倉家が長く福島の地に住んでいたからである。ただ、福島に落ち着くまで、移封を何度も繰り返した関係上、移封の地に記録が残存している可能性もある。気長に調査して行きたい。また、『嶋原一揆有増之記』や『嶋原記』等については別の機会に触れたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計8件）

武田昌憲「内閣文庫蔵・天草・島原の乱主要関係軍記 書誌（追加）」茨城女子短期大学紀要 35、2008、11p-24p、査読なし

武田昌憲「島原の乱の軍記-中世の余韻とダイナミズム-」『中世の回廊』勉誠出版収 2008 査読なし

武田昌憲「島原の乱の使者の戦い（その1）」

「毛利藩の場合-」茨城女子短期大学紀要 36 2009、査読なし

武田昌憲「上使の行程-板倉重昌と松平信綱の場合-(覚書)」、茨女国文 22、2010、13p-18p、査読なし

武田昌憲「島原の乱の使者の戦い（その2）」「紀州藩・仙台藩の場合-」、茨城女子短期大学研究紀要 38集、2011、17p-21p、査読なし

武田昌憲「『獻祖遺跡 有馬日記附』の中の『太平記評判』記事について」、尚綱語文 創刊号 2012、2P-8P、査読なし

武田昌憲「寛永十四年・十五年（島原の乱）当時の藩と島原の乱出兵状況（稿）-島原の乱の使者の戦い（3）-」、尚綱学園研究紀

要 第6号 A 人文・社会科学編、2012年3月、1P-22P、査読あり

武田昌憲『使者文学の基礎的研究-戦国・島原の乱を中心として-』平成20年~23年度科学研究費補助金研究成果報告書 2012、1P-57P、査読なし

〔学会発表〕（計1件）

武田昌憲「島原の乱の使者の活躍のことなど」熊本国語国文学会 2011年12月17日、尚綱大学

〔図書〕（計1件）

武田昌憲 他

『戦国軍記事典-天下統一編-』2011、天草・島原の乱概説、以下「島原の乱」関係の軍記 35作品執筆 596P-644P

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

武田昌憲 (TAKEDA MASANORI)
尚綱大学・文化言語学部・教授
研究者番号：00221375

(2) 研究分担者

なし ()

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし ()

研究者番号：